【資料２－２】

釧路市立大楽毛中学校

（開校　昭和五十三年四月一日）

大楽毛中学校は、大楽毛地区の急激な人口増により、さらに鳥取中学校の緩和を図るため設立された。

昭和五十一年二月二十五日、釧路市大楽毛一丁目十番六二の土地を学校用地として取得し、大楽毛小学校校下を中心に署名運動を展開、昭和五十二年一月二十二日、大楽毛中学校新設が公表された。

昭和五三年一一月一六日　池田校長、富樫教頭、開校取扱者発令
二月　二日　開校準備会発会
校章内定
四月　一日　教職員全員発令
校章制定
四月　六日　開校式、始業式
四月　七日　入学式（廊下で）
七月　三日　校旗贈呈式
九月二七日　校歌制定

初代校長池田博美先生は開校当時の思い出を『天馬百代飛翔』と題して次のように述べている。

「（前略）　開校創業黎明期の期間『忍苦建設創業之功』をモットーに、生徒、父母、教師が共々に、よき校風づくりに努力することを誓った。ヨーロッパ旅行の一日、ギリシャ・アテネの海と空のブルーに魅せられた私は、ギリシャ神話ペガソス（天馬）と文化遥濫し近代文明の源流となった風土に、豊かな人間形成に必要なものを感じて次の校訓を掲げた」

（「開校十周年誌」一〇ページ）

校　訓

「ペガソスの如く天を翔よう」
より高く　（知・真理）
より自由に　（徳・権利・責任）
よりたくましく　（体・生命）
（豊かな人間（調和・愛））

（昭和五十三年度　学校要覧）

前の文に続いて、池田先生は

「教育目標の一つ『世界に目を向ける生徒』は、二十一世紀を展望しての、国際性・信頼と尊敬を受ける日本人の育成を目指すものであった。『道は初めからない。一人が歩いて道ができ、二人が続いてやがて大きな道になる』。『道は近くてもいかなければ到着しない』とよく引用した語だった。開校十年を祝い、準備と創立黎明期の一人として、天馬百代（永遠）飛翔を心より願ってやまない」と結んでいる。

校章と由来

昭和五十三年四月一日制定
考案者　池田博美氏
デザイン　大森正明氏
校訓よりペガソス（天馬）の羽を外側に配し空高く天空を翔る可能性への挑戦を表す。その内側は、泉を掘る踏で勤労を、星は釧路市の市章であり、北西に巍然として輝く理想（真・善・美・聖・健）を表す。

中は中学校で◎は釧、くしろの意、中央の点はオタノシケ（砂浜の中央）を象徴している。より高く、より自由に、よりたくましくを念願してデザインされたものでスクールカラーはブルーである。

（昭和五三年度　学校要覧）

【資料２－２】

デザインを担当した大森正明先生（元弥生中学校長）は『ペガソスの翼、校章制作にあたって』と題してこう書いている。

「（前略）『ペガソスのように天を翔けよう』。この校訓が校章の原点であります。制作上、より高く、より自由に羽ばたくペガソスの翼、地を蹴ると泉の湧き出るペガソスの蹄、釧路市の象徴、この三点を強く要望されました。鳩ではなく、鶴ではない天馬の翼、さっそく神話の本を集め、ペガソスの姿を捜しました。大きく広げ、威厳ある翼を求めて・・・。

模型で最も悩まされたのは蹄であります。形態も配置上も難しい。ある時、天馬も蹄には馬蹄を付けているだろう。この発想が結果的には校章の中央を引き締めるポイントとなりました。最終的にはオタノシケの地名の由来〝砂浜の中央〟の砂を中央空間に配置し、依頼に応えました。本州製紙釧路工場から寄贈された校旗の中央、金糸銀糸輝く校章に胸を熱くした当時が懐かしく、今も帽章、徽章が私の宝物です」

（開校二十年誌「我が大楽毛」五〇～五一ページ）

校歌とエピソード

校歌は昭和五十三年九月二十七日に制定された。**岩瀬　ひろし**作詞、**八州　秀章**作曲による作品で、このお二人は「まりもの唄」のコンビで、大楽毛地区の先達、丹葉節郎氏の紹介で作られたものである、という。

三節にわたるそれぞれに、校長が目指す学校教育目標、さらに、経営理想を表す語句がきめ細かく散りばめられた作品となっている。

校訓から導かれる校章、そして校歌へと学校創造の理念、哲学が見事に一体の強固な柱立てとなって、これまでの学校経営につながり、活かされてきた、という思いを強くするのである。

ところで、本校の校歌について第四代校長大月武志先生は「大楽毛中学校の入学式で新入生に校歌を披露する場面があるんです。一年生は校歌を知りませんので、音楽担当の先生の一人がピアノ伴奏、一人がステージで校歌を歌って、生徒や父母に聴かせるのです。女教師の歌声が素晴らしくて私自身聞き惚れたものです。教師の上手な範唱というのは指導上大切なことです」と音楽校長の弁。また、「昭和六十二年に、ＮＨＫ交響楽団が来釧した折、ベテランの方々による団友コンサートが本校で催されました。当日朝、私が校歌の楽譜を渡して演奏会の最後に合奏してもらったんです。さすがプロですね、初見で素晴らしい演奏でした。生徒たちも声を揃えて歌いましたし、アンコールもあって本当に感動したひと時でした。涙がこぼれて仕方なかったです」とその日の情景を再現しながら、これまた熱弁を振るって語った。

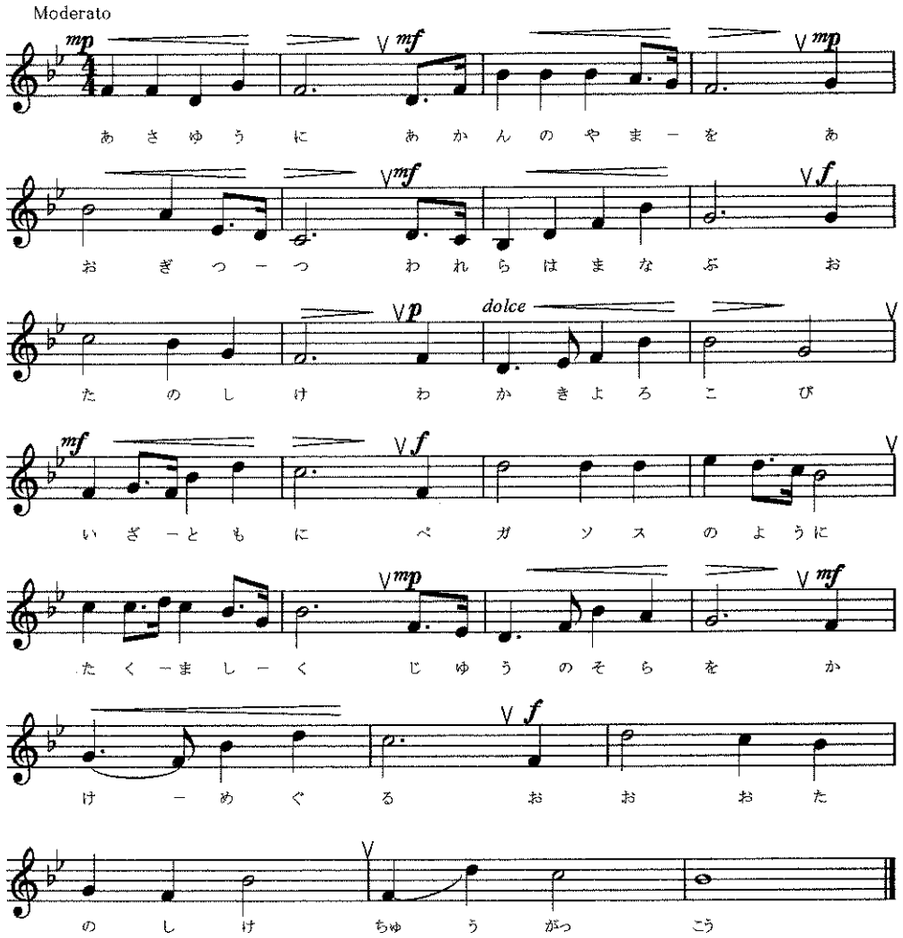
ところで、本校校歌の作詞者岩瀬ひろし氏は「月刊歌謡研究」を主催する方であるが、昭和六十一年八月に東京で、教養歌謡千曲突破記念、歌謡研究主幹二十周年記念『岩瀬ひろしさんを祝う会』が開かれた。発起人代表が作詞家の西沢爽氏、友人代表が作詞家の星野哲郎氏という豪華なその会に大月校長が招待され、出席した、という。大楽毛中学校校歌が岩瀬氏作詞八〇〇曲目に当たるとのことからであった。「当日のことは今も目に浮かびますよ」と大月先生。祝う会では、岩瀬ひろし、八州秀章コンビの「まりもの唄」が安藤まり子さんの熱唱で会場を沸かせた、とのことであった。大月先生は「これはちょっとした宝物かな」と持ち帰ったパンフレットを大切そうに見せてくれた。

〝ペガソスのようにたくましく　自由の空を　翔けめぐる　おお大楽毛中学校〟。校歌の歌声は今日も響きわたっている。

参考資料　「開校十周年誌」
（昭和六十二年九月十九日）
開校二十年誌「我が大楽毛」
（平成十年三月二十四日）

大楽毛中学校　校歌

岩瀬　ひろし　作詞
八洲　秀章　作曲



大楽毛中学校校歌

一　朝夕に　阿寒の山を　仰ぎつつ
　　われらは学ぶ　おたのしけ
　　若きよろこび　いざともに
　　ペガソスのように　たくましく
　　自由の空を　翔けめぐる
　　おゝ　大楽毛　中学校

二　より高き　知性の玉を　磨きつつ
　　真理の泉　掘る友よ
　　若きひとみも　はつらつと
　　丹頂のように　美しく
　　理想の虹を　今えがく
　　おゝ　大楽毛　中学校

三　遙かなる　太平洋を　望みつつ
　　三とせを集う　おたのしけ
　　若き生命も　健やかに
　　北極星の　空の下
　　世界の友と　手をつなぐ
　　おゝ　大楽毛　中学校